

第5期町田市民文学館運営協議会第6回議事録

- 開催日時 2022年7月26日(火) 18:00~20:00
- 開催場所 町田市民文学館 大会議室
- 出席委員 渡邊正彦(会長)、竹内栄美子(副会長)、熊谷玄、長尾洋子、名取玲子
- 欠席委員 阿部哲也、貝原俊明、瀬川ゆき、平井宏典
- 事務局出席職員
野澤茂樹(館長)、神林由貴子、山端穂、谷口朋子

○資料

- (資料1) 文学館に関する主な事項について(3月22日~7月25日)
- (資料2) 「57577展」について
- (資料3) 「57577展」アンケート集計
- (資料4) 「57577展」アンケート(記入部分)
- (資料5) 「読む将展」について
- (資料6) 「読む将展」アンケート集計
- (資料7) 「読む将展」アンケート(記入部分)
- (資料8) ニューノーマル時代における町田市民文学館の課題
- (資料9) 平井宏典氏「第6回町田市民文学館運営協議会について」

【次第】

- 開会 館長あいさつ
- 議事

1 報告事項

- i. 3月22日から7月25日までの文学館の出来事について
- ii. 「57577展」の結果報告について
- iii. 「将棋作品をひもとく!“読む将”のススメ展」の結果報告について
- iv. 遠藤周作生誕100周年記念事業について

【事務局から説明】 「57577展」「読む将展」について

【委員】57577展については手間がかかっているなと思って拝見した。それに沢山人が来て評判が良かったとの報告が前回もあったと記憶している。よかったと思う。将棋展は版画美術館の帰りにゼミの学生と共に立ち寄った。先程の報告では「失敗だった」ということだが、私はとてもよかったと思う。町田市民文学館に来たのは初めてだと言っていた知り合いの近代文学関係者も、読む将展について、着眼がよく、これを無料でやっているのは驚きだと言っていた。近代文学関係の人から見るととても充実した展示で、私も観てよかったと思う。乱歩の将棋盤など豪華なものもあり、将棋とそれに関わった文学者の流れがわかりやすく、ちょっと意外な人が関わっているのがわかり、と

でもよかった。アンケートを見ても好評のようなので、人が来なかったことで「失敗」ということはないのではないかと思った。確かに報告をする際に観覧者数が多くないという具合が悪いというのがあるのかもしれないが、中身としてはとてもよかったと思う。ちなみに、今回の展覧会では入口に係りの人がいなかったが、観覧者はどのようにカウントしているのか。

【事務局】 入口にセンサーがあり、そのセンサーで確認している。

【委員長】 観覧者数だけで展覧会を評価するのはいかがなものか、とのご意見でしたが、みなさんいかがでしょうか？

【委員】 平井委員の文章に「国立博物館でも入館者数を経営指標とすることを止めました（参考数値とはしている）。新たな博物館法では『成果の活用、関係機関との連携協力による文化観光など地域の活力の向上への寄与を努力義務化』がなされました。ICOMの新たな博物館定義案でも、博物館はより具体的に地域課題にコミットする機関であるという文脈になっています」と書かれているが、これからはこのような考え方が重要なのではないかと感じた。

「読む将展」が目標値に達しなかった要因の一つとして、日本将棋連盟の協力を得られなかったことを挙げているが、やはりこの影響が大きいのではないかと思う。将棋に疎い私でも、日本将棋連盟は業界の中で発信力が高く、一般やメディアに対して存在感を持っているのではないかと思う。なぜ協力を得ることができなかったのか。

【事務局】 当初、話題性のあるイベントとして様々なプラン（棋士の揮毫の展示、棋士へのアンケートを SNS で発信等）を提示して担当者レベルでは了解を得ていたが、最終的に理事会での承認が得られなかった。連盟 HP への情報掲載、新聞各社将棋担当記者へのプレスリリース等にはご協力いただいたが、会期を通して一緒に盛り上げていただくには至らなかった。

【委員】 57577展では関わった若い人たちが個人の SNS で発信し、自分たちのファンを集めた結果が集客につながっているという話だった。これは公園でイベントをする場合の人の集め方と似ている。大きなイベントをするとき、イベント名でバンと大々的に告知することはあまりなくて、10人のファンを持っているコミュニティ100個に声をかけてそのファンが集まってくれば1000人になるという考えで集客を作っていく。57577展もそれに近いのではないか。今の人は今日は何をしようかと直前に予定を決める人が多く、そのスタイルに合っていた。そういうようなやり方もあるのかなと思った。国立美術館の〇〇展と大々的に告知するよりも、3回くらい記事を見るとじゃ行ってみようかなと思う。そういう効果があったのだと思う。

【委員】 次回企画するときに、今回学んだことを利用するのが大事なのだと思う。

【委員長】 平井委員のプリントのご自身の茅ヶ崎での経験をお書きになっている箇所「来館者数よりも当館の理解者や本当の意味での利用者の数を増やす努力へと転換した意味で大きいと考えています」とお書きになっている。この「本当の意味での利用者」の意味を考えるのが後半の議論「ニューノーマル時代における町田市民文学館の課題」につながっていくのではないかと思う。後半での議論の際にも念頭においていただければと思う。

【事務局から説明】 「遠藤周作生誕 100 周年記念事業」について

【委員】私の知っている卒業生も 100 周年に合わせて本を出版すると言っていた。去年、新しい作品もみつかるなど今も話題の人であり、町田市民文学館は遠藤にゆかりのある文学館なので期待している。

【委員】一人の作家を総括できる機会はなかなかないので楽しみ。

【委員】消費者目線では、話題性という意味では期待できると思う。私自身は実質的な貢献はできないと思うが、若い人たちも参加の余地があるものになるといいと思う。

【委員】長崎の文学館とタイアップしたりという可能性は考えられないのか？

【事務局】前回はそうしたように協力を得ることはできる。それよりも、誰とつながるとムーブメントを作れるのか、関心の高い人にどう情報を伝え、どう参加してもらうかが大切だと考えている。

【委員】この地域は大学が多くコンソーシアムもある。文学部がある大学や機関と関わりが持てるといい。文学部の先生はそれぞれの時代に分かれて専門の部屋に収まっている感じがあり地元ゆかりという発想があまりない。記念行事・イベントにどうやって関わってもらうか、文学研究の在り方・文学教育の在り方にどう関わりをもたせられるかが課題。

【委員】キリスト教関係は既にできてきているので、これを機会に何か新しいアプローチ・新しい切り口が見つかるといい。

【委員】本屋でも平置きになるのか？ そういうところにちゃんと文学館の情報がでることが大切。違うシチュエーションで情報を何回目にするかが大事。その情報に触れる機会が多ければ多いほどよいと思う。そういう機会を増やしていくといい。

【委員】遠藤はキリスト教の絵の評論を書いているが、他ジャンルとのタイアップとして絵画を展示できるようにするとか、いろいろ切り口はあると思う。

【委員】映画などマルチメディア的な観点から考えることもできるかもしれない。

2 討議

(1) ニューノーマル時代における町田市民文学館の課題について

- i. 第 5 期運営協議会で見えてきた展望と今後の課題について
- ii. ニューノーマル時代に求められる事業について

【事務局から説明】

【事務局】平井先生のご意見の紹介

【委員】先程のアンケートをみるとリピーターの人が多くいて、そういう人を大事にしていくことは必要だと感じた。茅ヶ崎の「ゆかり研究員」は、もっと踏み込んだ形で館にコミットしてくれる人を募っているということか？

【事務局】そうだと思う。

【委員】町田市民文学館には、公認の友の会のような組織はないのか？

【事務局】友の会はないが、茅ヶ崎の「ゆかり研究員」に近いものとして「市民研究員制度」があ

る。これは市民が主体的に研究に取り組むことを理想としているが、参加する方は自分で調べるのではなく、教えてもらえらると思つて集まる人が多く、自立的に調査していく形にするのは難しい。チューターのような存在がないと進んでいかないとつた問題もあり、ここ数年は活動を中止していたが、今年度から玉川大学の協力を得て、(冒頭の報告事項で玉川大学の学生との連携事業を報告したが) 来年度の完成を目指して中学生向けのまちだ文学ガイド作成事業を始めた。中学生に近い若い視点で、より親しみやすいガイドブックを作れらると思つている。

- 【委員】観光コンベンション協会で町田の観光案内人の養成講座がある。町田に詳しい人材を育てて、その方たちがその知識を活かして自分でツアーを企画・運営して人を集める、そこに案内人の個性が出て面白いツアーがたくさん生まれる、というのが理想だつた。実情としては、協会の用意したツアーのガイドに手を挙げる人はいるが自分で企画するには至っていない。先程の説明にもあつたとおり、シニア世代では誰かが教えてくれるのを待つという傾向が強いのではないかと思つた。それに対して、いま文学館が取り組んでいる玉川大学の学生との協働事業では、中学生に対して、世代的に近い大学生の視点で作つたものが広まていくのはよいことだと思つた。

影響力のある人がSNSで発信して一言つぶやくだけでバツと広まるとつ規模ではなくても、やはりファンを見つけて巻き込むのもいいのではないか。与えらるのを待つている人ではなく、文学館が好きでたまらない人を捕まえられるよう、文学館の職員ももっと地域の人の中に出ていって、地元にいる文学館を応援してくれそうな商店会のご主人などを見つけ、それをきつかけに助けてもらつことも必要かと思つる。

- 【委員】文学館の外にでていくのはよいと思つる。目的性を持って文学館を訪れてもらつことにどうつなげていくかという方法もある一方で、偶然文学館に出会つ(セレンディピティ)という作り方も考えてよいのかと思つる。先程も申し上げたように情報に何回接するかでインプットのされ方も変わるとつるし、例えば、芹ヶ谷公園で知つたとか、駅前で知つたとか文学館との出会い方が多様であればあるほどいいのではないか。それがリアルな価値の一つなのかと思つる。自分が外に出て、何かに出会つ、偶然何かを知る、というもののなかに文学館が位置づけられるといいと思つた。具体的にいうと芹ヶ谷公園のイベントに参加するといつ、今までやつてこられたことをつていくといつ話に帰着する。こつといったことが大事なことだつたのだとコロナを経て思つる。結局、リアルがすべてデジタルに移行するのではなく、デジタルでできることとリアルでできることをみんながわかつてきて、それには個人差があることまでは理解してきている。自分から探していかないと出会えないデジタル、もしくは自分がほしいものしか得られないデジタルに対して、リアルはそうでないところが多分になる。ある意味、デジタルでいえばノイズとなるものがすごく大事だつたりすることを考えると、文学館がどう人と出会つのか戦略が必要になつてくる。

- 【委員】文学館のミッション・存在意義に「目指す姿」として「まちの魅力を高める」と書かれてはいるが、具体的にはどうつ魅力なのか、まちの魅力の具体的な部分をはつきりしない。「ことばらんど」「文学」を中心に考えたときに「町田」とつローカリティを結び

付けて、ゆかりの作家がいます、でいいのか。それとは別のものなのか。一つにまとめられなくてもいいと思うがもう少し具体性をもってイメージできるようになるといい。平井委員の資料の「協議事項について」に『町田』というところを他市町村名に置き換えてもそのまま利用できるような文言になっている」とある。「町田の地域課題とは」というところから出発してポストコロナ時代に文学館に求められることは何かという順番で考えていくと、一般的に求められることではなくローカリティ・地域課題に結び付けていけるのではないかと思う。

資料8裏面の課題4「つながりを重視した事業の充実」の「つながり」について、つながりをつけたとしても、その後どんなふうにそれを維持し発展させていったらいいかというところにも課題があると思う。

長尾ゼミで、たけがみ展の関連イベントをやらせていただき、そこに文学館との一つの「つながり」ができた。さらに、読み聞かせをしてくれた「桃の木工房」とのつながりの中で、想定していなかった世代間の交流や絵本のもつポテンシャル、読み聞かせには非常な技術が必要だということにも気づかされた。市民にとっての文化的なつながりを、異なる世代・異なる活動領域の中で発展させていくにはどうしたらよいかと考えさせられた。

しかし、このつながりを発展させたいと思っても「総合文化学科」という枠組み、「長尾ゼミ」という絵本や文学をメインにしているわけでもない、子どもたちの教育や保育等をメインにやっているわけでもないなかでは難しい。一回限りのイベントで終わるのではなく、つながりをいい方向にしていくためには発想の柔軟さ、工夫が必要。そうすればさらに派生したつながりが生まれていくのではないかと思う。

【委員】茅ヶ崎のゆかり研究員と同じように、リピーターの人が文学館サポーターみたいになって企画などにも協力できるような形になるといいと思う。その時に指導を待つばかりという問題点もあるかもしれないが、「ゆかり研究員」は一つのヒントだと思う。

【委員】文学館の展示を見に来てくれる人は、毎回来てくれなくてもいいと思う。3回のうち2回は見に来てくれるとか、そういう人を増やしていくことが必要なのではないかと思う。多様性をいかに担保していくかが重要だと考える。

【委員長】様々なご意見をいただきありがとうございました。新型コロナウイルス感染症をきっかけに時代は大きく変化しています。この運営協議会が開催された2年の間に、ことばらんどなど文化施設に求められるニーズも利用者の年代も私たちの生活様式も変化しています。文学館は委員の皆さまからのご意見をもとに、様々なチャレンジをしてきましたが、これで終わりとせず、引き続き変化に対応していく必要があると思います。

第5期の運営協議会は本日で一区切りとなりますが、議論の中で出てきた課題を第6期へと引き継いでいただければと思います。皆さま2年間お疲れさまでした。